平成 29 年度　第2回　松江市総合教育会議　会議録

日　時:　平成 30 年1月 22(月)　13:00～15:00

場　所:　松江市役所本館3階 常任委員会室

出席者:　松江市長　　松浦正敬

松江市教育長　　清水伸夫

松江市教育委員　櫻井照久、伊藤由紀夫、藤原　文

市立小学校教諭　梶田尚子（生馬小学校 教諭）

錦織栄子（八束学園 教諭）

結田恭士（玉湯小学校 教諭）

瀧川智子（古志原小学校 教諭）

市長部局　　政策部長　井田克己、政策部経営専門監 田原　弘、政策部次長 須山敏之、

政策企画課:岡田　等政策係長

教育委員会事務局　高橋良次 副教育長、古藤浩夫 副教育長、杉谷　薫 教育委員会次長、

学校教育課:三賀森卓司課長、川上淳一指導研修係長、中釜智子指導主事

教育総務課:仲田雅彦 教育総務課総務係長、石飛秀人 主任行政専門員

○（事務局）三賀森 学校教育課長

失礼します。それでは、予定していた時刻になりましたので始めさせていただきます。

私は松江市教育委員会学校教育課長の三賀森と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

皆様には大変お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。これより平成 29 年度第 2 回松江市総合教育会議を開催いたします。

本日は多々納教育委員様が都合によりご欠席でございますのでお知らせいたします。

それでは開会にあたりまして松浦市長がごあいさつ申し上げます。

○　松浦市長

それでは，今日は大変荒れ模様の中でございますけれども、本年度第 2 回目となります総合教育会議にお集まりをいただきまして，誠にありがとうございます。

昨年の 7 月に第 1 回を行いました。そこでは、いわゆる「教員の多忙化」ということをテーマに行ったわけでございます。これを受けまして、その後、教育委員会では学校教員の勤務実態調査を実施されまして、現在集計・分析を行っておられるということでございます。今後も教育の課題や在るべ

き姿を共有していきたいと思っております。

本日は、小学校英語の早期化、あるいは教科化について設定をさせていただいたところでございます。

この英語の早期化・教科化ということにつきましては、授業の時間数がこれまでよりも増えるということに対して、負担感、あるいはどのように対応していくのかということが課題になってくるわけでございますが、今、各校において工夫が行われているというように思っておりますし、もう一つはやはり時間だけではなくて、どういう授業を行っていけば良いのかという中身の問題も色々あろうかと思います。

これからインバウンド､外国人の観光客の方々もたくさん松江を訪れるということでございまして、英語の普及ということは、我々これからもやっていかなければならないわけでございます。そういう政策に対して、皆様方、英語の教科化に取り組んでいただくわけでございますけれども、ぜひ今日は様々な世代の先生方に来ていただいておりますので、どのような課題があるのか、受け止め方、実際どういった工夫を行っておられるのか、また､『こうしてほしい』というものがあれば、そういったことを聞かせていただいて､この総合教育会議の質を高めていきたいというように思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

それでは、本日は平成 32 年度より実施が決まっております新学習指導要領から小学校英語の早期化・教科化についてご議論をいただきたいと思っております。

最初に、事務局のほうから説明させていただきます。

○（事務局）学校教育課 川上 指導研修係長

失礼します。学校教育課指導研修係長の川上です。どうぞよろしくお願いいたします。座って説明をさせていただきます。

本日のテーマ「小学校英語の早期化・教科化」についてですが、まず、今までの小学校外国語教育がどのように進んできたのかについて、簡単に振り返ってみます。

今から約 20 年前、平成 10 年度の学習指導要領改訂で、総合的な学習の時間に国際理解教育、この一環として「外国語に触れる」という内容が加わりました。

その 10 年後、平成 20 年度の改訂では、5・6 年生で年間 35 時間ずつ、時間割でいいますと週 1 コマ、この時間、外国語活動が必修化され、今に至っているところです。

それでは、資料に沿って説明いたします。なお、資料につきましては、特にお断りするもの以外に

つきまして、文部科学省作成の資料となっております。

それでは、お手元の資料１をご覧ください。資料１は外国語教育について、図の左側に現状の分析、右側に現状を受けて、今後どのように外国語教育が変わっていくのかが示されております。小学校の現状につきましては、左下にあります青色の枠の中に記載されております。

まず、これまでの取組の成果として、英語に対して肯定的な気持ちを持つ子どもたちが増えたということがあります。文部科学省による調査では、中学校１年生の約８割が「小学校で読むこと、書くことをもっとやっておきたかった」と回答しております。読み書きに対する意欲の高まりにつながったところです。

また、現在は中学校で初めて英語を書く学習が入ってくるわけですが、ここでつまずく子どもたちがいる。つまり音声から文字への接続に課題があるということです。

この現状を受けて、これからは小学校３年生から英語に慣れ親しみ、その慣れ親しんだ英語について、5 年生からは読むことや書くことも取り入れて、「中学校とのつなぎをスムーズにしよう」というのが今回の学習指導要領改訂の考え方になります。

図の右側の青色の枠にありますように、3・4 年生では週１コマ程度、聞くことや話すことを中心に英語に慣れ親しみ、高学年の 5・6 年生では週 2 コマ程度、段階的に読むことや書くことにも加えて学習することになっております。

１枚めくっていただきますと資料２になります。資料２につきましては、新学習指導要領のポイントについての資料になります。右側上段が緑色の枠の中に 3・4 年生について、左側上段が青色の枠の中に 5・6 年生について書いてあります。

大まかにご説明しますと、3・4 年生では英語に慣れ親しみ、英語学習への意欲を高めることが中心になっていきます。それが 5・6 年生になりますと慣れ親しむことに加えまして、基礎的な力を付けることも求められます。

例えば、3 年生では自分の好きなものについて伝え合う活動というものがあります。子どもたちは「I like」といった表現を使って楽しく英語に慣れ親しみますが、例えば「I like blue」という言い方を覚えさせるわけではありません。そして、教科となる 5 年生からは、「好きな色は何ですか」と聞かれたときに、「I like blue」と言うことができるところまで高めていきます。つまり、5・6 年の教科では、慣れ親しむだけでなく、定着までを目指すということになります。

ただし、文法の学習をするというわけではありません。読むこと、書くことについては、できるようにするレベルまで指導する内容は限られております。例えば書くことについては、表の左側中段になりますが、1 の目標があります。その「(5) 書くこと」のア・イに赤字で示されているように、アルファベットの大文字や小文字を書くこと、十分に慣れ親しんだ英語を見て、それを書き写すことができるレベルまで指導することになります。

なお、平成 32 年度の全面実施からは、3・4 年生が外国語活動、5・6 年生は教科となりますが、平成 30 年度と平成 31 年度は移行期間にあたりますので、この間は 5・6 年生についても外国語活動の枠組みの中で行うことになっております。つまり、数値による評価は行いません。平成 32 年度からの評価の具体については、現在のところ文部科学省で検討が進められているところです。

この移行期間についてですが、大きく 2 通りの過ごし方があります。文部科学省から示された 15 時間分の内容を扱う移行措置と、これを越えて行う先行実施があります。移行措置の 15 時間分については、全国の小学校で必ず行わなければならないことになっております。

松江市においては、現場の先生方、代表 5 名にお集まりいただきまして、検討をしました。そして来年度から先行実施をすることにしております。つまり、この 4 月から松江市の小学校では、3・4 年生で週 1 時間、5・6 年生では、現在の週 1 時間に加えて、もう 1 時間分の外国語活動の時間をするということになっております。

この増える 1 時間をどうやって生み出すかということですけれども、いくつか方法があります。例えば、今までの 5 時間授業だった日を 6 時間授業として、1 コマ増やす方法。15 分の短時間学習、これを週に 3 回やり、そして 45 分とする。つまり 1 コマ分として数えて増やす方法があります。また、夏休み等を短くして時間を増やす方法があります。

松江市では、各学校が自校の実情に応じまして、来年度の計画を立てているところですけれども、多くの学校では、今まで 5 時間授業だった月曜日などを 6 時間授業にすることで対応のほうを考えているようです。

中には先ほどお話しました短時間学習、モジュールと言いますけれども、この時間を使ったり、夏休みを短縮する方法、また、それらを組み合わせてする方法等を考えている学校もあると聞いております。

続きまして、資料 3 をご覧ください。資料 3 は指導体制についてのものになります。なお、赤枠で囲んでおります別紙 1、2、3 については、本日の資料には入れておりませんのでご了解ください。

資料の中心のところ、学級担任とあるように、指導にあたっては、子どもたちのことを良く分かっている学級担任の存在が欠かせません。小学校の教員免許は教科ごとのものではありません。小学校全科となります。例えば、理科の指導をするのに理科の免許が必要なわけではなく、同様に英語の授業をするにあたり、英語の免許が必要なわけではありません。

また、子どもたちが生きた英語に触れる機会を充実させるために、資料の右側に記載されておりますように、ALT などの協力を得て授業を行うこともあります。松江市においても、ALT と外国語活動指導協力員を派遣しております。このことにつきましては、後ほど資料 6 でもご説明いたします。

資料の左側には専科教員とあります。全国で 1,000 人の専科教員の加配が、学校における働き方改革として先月末に決まったところです。これらの指導体制を支えるものとして、図の下のところ、緑

色や青色の枠内で示されているような支援が国によりなされております。これらのうち、いくつかにつきましては資料４でご説明をいたします。

資料をめくっていただきますと、資料 4、新教材についての資料になります。まず、7 ページをご覧ください。先ほどご説明いたしましたように、新学習指導要領は平成 32 年度が全面実施になります。つまり、平成 32 年度から 5・6 年生の子どもたちは、教科書を使って英語を勉強することになります。それまでの間は、まだ教科書ができておりません。このため、教科書ができるまでの間、文部科学省が教材を作成し、全国の小学校に配ることになっております。この教材を新教材といいます。7 ページにその整備スケジュールが載せてあります。

3・4 年生用の新教材は「Let's Try」、5・6 年生の新教材は「We Can」といいます。新教材に併せまして年間指導計画例、活動例、授業で使う英語の表現集や指導のポイント等が載っております研修ガイドブックなども用意されております。

松江市では、これらのデータや児童用冊子、教師用指導書のデータを学校ネットワークに掲載しまして、先生方が学校で使うコンピューターで見ることができるようにしております。

めくって 8 ページをご覧ください。8 ページはデジタル教材についての資料になります。このあと実際にご覧いただきます。

9 ページになります。9 ページは教師用指導書、学習指導案例、年間指導計画例についての資料になります。左下にありますように、QR コード、こちらのほうが掲載されております。先生方が授業準備の際に、これを使って英語の発音を確かめられるようになっております。

めくって 10 ページは研修用動画についての資料になります。ここにあるクラスルーム・イングリッシュや基本英会話などについて、画像と音声のデータが提供されており、これらについても先ほど述べましたように、松江市では学校ネットワークに掲載をしております。

11 ページは新教材説明会での教科調査官の説明を当課のほうでまとめまして、松江市の研修で説明資料として使っているものになります。新教材の特色として 9 つ挙げております。これらがこれからの小学校の英語で大切にしていることであるというように考えているところです。

それぞれの特色を具現化したものが、楕円の中にあります「Let's Watch and Think」や「Small Talk」などになります。「Let's Watch and Think」などの説明が 12 ページから 17 ページまでに載せてありますので、このあとの質問や協議の際にまた参考にしていただけたらと思います。

それでは、とんで 19 ページになります。19 ページからの資料５になります。こちらの資料５につきましては、国の財政措置等についての資料になります。

19 ページは、平成 30 年度の文部科学省の予算案から抜粋したものになります。

それぞれの事業については、20 ページに参考資料として付けております。

また、21 ページには ICT 環境整備に関係する参考資料を付けております。図の右側、白い枠の中

に目標とされる水準が記載されておりますが、現在、松江市では電子黒板、それから実物投影機など、まだこれらの水準に達していないものがあります。

続いて 23 ページ、資料 6 をご覧ください。資料 6 は松江市の ALT と外国語活動指導協力員についてのものになります。まず、ALT についてですが、松江市では 16 名の ALT をすべての小中学校と女子高校に配置しております。

下のところ、参考として、来年度の ALT の配置表を載せております。このように、学園ごとに ALT を配置しまして、その各学園の中で、例えば「この日は A 小学校」、「この日は B 小学校」、「この日は C 中学校」というように、相談して分け合うようにしております。現在は各学園でこの配置表を基に、来年度どのように進めていくのか計画を立てていただいているところです。

それでは、先ほどの資料 3 のところで出てまいりましたが、ALT について。国は JET-ALT に限り、地方交付税措置をしております。松江市は民間業者に ALT 業務を委託しております。これについても、財政的支援をいただけるように国に対して要望しているところになります。

次に、指導協力員についてですが、松江市では今年度、英語が堪能な地域の方 13 名を外国語活動の指導協力員として小学校 31 校に派遣し、授業のサポートをしております。

以上、用意した資料の説明になりますが、最後に資料 4、8 ページのところにありましたデジタル教材を一部ご覧いただきたいと思います。

○（事務局）　三賀森 学校教育課長

今からプロジェクターを使ってご説明しますので、どうぞ見やすいように席を動かしてご覧ください。

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

それでは、座って失礼いたします。

今、ご覧いただいていますのは、この 4 月から学校で使うようになる 5 年生用の「We Can 1」の目次です。実際には、このデータが 2 月ぐらいのところで各学校へ届きます。学校では、これを各学校のコンピューターにインストールをして、そのコンピューターを教室へ持って行ってプロジェクターにつないで、子どもたちみんなでそれを見ながら勉強をするという予定になっております。ここにありますように、この本で扱う主な活動というのが色々ございまして、これらのデータがこのデジタル教材の中には入っております。

それでは、ユニットの 1 から見ていただきたいと思います。このようにカーソルを合わせて中に入るようになります。まず 5 年生。教科になって初めてのユニットなのですけれども、1 ページ目は、「世界でどのような日本人が活躍しているのかな」とか、「日本国内で英語を使う場面はどういうとこ

ろにあるのかな」ということを、映像や音声を見て子どもたちが考える、そういうことから始まるようになっております。

それでは「Let's Watch and Think」に入ります。このような動画が用意されています。今、一つご覧いただきますが、5年生の最初では、これを理解するのではなく、「これから勉強すると、こういうことができるようになるんだな」というような見通しを持たせたり、憧れを持ったりとか、そういう意欲付けのためのユニットになります。

それでは、買い物の動画をご覧いただきます。

（教材視聴）

（事務局）学校教育課 中釜指導主事

このような動画を子どもたちは見て、「こういうことを言えるようになりたいね」とか言って、次の時間に入っていくようになります。

ページをめくるときはここをクリックするのですけれども、次のページに行くと、まず、「Let's Listen」というところがあります。4人の登場人物がどんなものを好きか聞いて理解する勉強です。

（教材視聴）

○（事務局）学校教育課 中釜 指導主事

こういうのを聞いて子どもたちが、「何が聞こえた」とか、「自分はこれは聞こえなかった」とか、そういう話合いをしたりして答えを考えます。そして、答え合わせをしていく。そういう流れになります。

これを聞いた学習の次に「Let's Play」といって、実際に「What color do you like? 」とか、そういうのを友達同士や先生とやり取りをする勉強があります。

こういった表を使って、子どもたちはまず、「What color do you like? 」と言うのを練習したりして、それから実際にやり取りの学習をするのですけれども、先生やALTが英語を「Repeat after me.」とやっても良いのですが、そういうことができないときは、「What color do you like? 」というように音声データで進めることができるように用意がされております。

このようにして、次も「Let's Listen」や「Let's Play」をやっていって学習が進んでいきます。

次の「Let's Listen」をご覧いただきます。

（教材視聴）

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

先ほどお聞きいただいた「Let's Listen 1」と比べていただいて、いかがでしょうか。まず、会話形式になっていることが変わっていますし、英語の量も増えています。このように、段階的に学習を進めるようにデジタル教材は作られております。答え合わせもできるようになっています。

そしてその次「Let's Play」をしたあとに、このユニット 2 つ目の「Let's Watch and Think」になります。これも段階的に進んでいくようになります。

（教材視聴）

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

これを見て、子どもたちは答えを確認したりして、次の時間に自分が自分のことを英語で話す練習に入っていくようになります。

段階的になっているということともう一つは、小学生ですので、イラストであったり、映像であるように、どのような場面で誰がどのような表情をして話しているかということを見ることによって理解が深まるために、たくさんの映像が用意されています。

このあと、ざっとご覧いただきますが、このように段階を踏みながら、楽しく学習ができるようになっております。このページをご覧いただくと分かるように、緑色の「Let's Watch and Think」が増えています。これは 5 年生よりも 6 年生がもっと多くなっています。これは先ほどから申しておりますように、映像の助けを得ながら学習を進められるように、そのような配列になっているということです。

それから、このように線を引いたり、書き込んだりすることができるように用意されていることや、道具箱というのが用意してありまして、例えばこのように、カテゴリーの中で、例えば「動作の絵が欲しいな」というようにすると、絵カードを作ることもできるし、このように（教材から）音声を出すこともできるように作られております。

このようなデジタル教材が、3 年生から 6 年生までの全ての学年用に作られて今年度中に学校に届き、紙媒体のものと一緒にこの 4 月から学習が始まるように用意されております。

以上でございます。ありがとうございました。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

続きまして、英語の早期化・教科化にあたって、実際に学校現場のほうで色々と準備を進めてもらっているのですが、本日、4 名の教員に参加していただいております。順番にご紹介させていただき

ます。

まずは伊藤教育委員さんの隣、古志原小学校の瀧川智子教諭です。

それから、玉湯小学校の結田恭士教諭です。

隣は、生馬小学校の梶田尚子教諭です。

そして、八束学園の錦織栄子教諭です。

今日、4 人の先生方に来ていただいております。学校現場の英語の教科化・早期化になるにあたっての思いや現状について、1 人ずつお話を聞きたいと思っております。

最初に、錦織栄子教諭からお願いします。

○八束学園　錦織教諭

それでは失礼いたします。八束学園からまいりました錦織といいます。本校は 1 年生から 9 年生までの学校となっております。6 年生担任をしております。座って失礼します。

学校現場としましては、外国語活動が始まってからしばらく経っておりますので、今までやっと慣れてきた感じのところで、それから今度は教科化になるというようなことです。「また大きな変革の波がやって来たな」と思っております。

私たちの年代としましては、英語が入ると知って教員になったわけではないので、途中から英語が入るという感覚をもっています。しかし、子どもたちにとってとても大事なことであり、今後すごく大事になってくることはみんな理解しておりますが、本当に正直に申し上げまして、「それだけの技能を全ての教員が持っているか。指導力も英語力も」と言われると、努力はしておりますが、難しいところではあるかなと思っております。

日々の授業につきましても、やはり教材というものはとても大事なものだなと感じております。特に視覚的なものというのは、どれにも大事なものです。うちには使えるパソコンが 1 台と、それからプロジェクターが 1 台ありますが、それを 1 年から 6 年の計 8 クラスで使っております。6 年教室は 2 階なのですが、置いてあるところは低学年に近いところに置いてありますので、それを時間になると自学級まで持ち上がって、使えるようにセッティングをします。

たったそれだけなので、それほど手間ではないとお考えかもしれないのですが、10 分休憩の間に、子どもたちは色々なことを担任に話しかけてきます。困ったことだったり、今すぐ動いてほしいことだったり。そういったことの対応をしながら、機材を下から持ってきて、それからセッティングしてというのはなかなか大変なのですが、たった 1 台でそれをやっております。

子どもたちの意欲が何よりも学力の定着につながると考えておりますので、「子どもたちの意欲のために」ということで、どの教員もがんばっております。

やはり「視覚的に」ということと、「体験的に」ということと、「必然的に」というのは、この外国

語活動では絶対に必要なものだと思っております。そうすると、やはり子どもたちが「見たいな」、「やりたいな」という気持ちを出すためには、今度の新デジタル教材は本当にすばらしいものであるなと思いながら、「さて、これをどのように効果的に子どもたちに使っていくことができるだろうか」ということを現場でも今、考えております。

「あるもので何とか」ということをみんなで考えてはおりますが、3・4 年生で週 1 時間、5・6 年生で週 2 時間となりますと、今の授業数よりもはるかに外国語活動で使用する授業が増える。さらにはそれだけではなくて、ほかの教科でも使っていくのは変わらないわけで、パソコンやプロジェクターだけに関わることではないのですが、一つ取り上げると、そういったものに関してもみんなが「同等に子どもに使いたい」となりますと、なかなか本校では難しいところがあるかなと思っております。

それから、本校は 9 年までおりますので、15 の春を見据えてということで、色々と英語についてもお話を聞いております。やはり英語にしても何にしてもですが、積み上げていくということはとても大事なことです。そうしますと、先ほどの教材にも少し出てきましたが、絵本というのは低学年においては非常に有効なものです。

もちろん今回 1・2 年生は外国語活動に入っておりませんが、うちの学校では「慣れ親しむ」、「英語が楽しいものである」、「言語としてたくさんの方々と、たくさんの国の人とコミュニケーションがとれる一つのスキルとなる」ということで、絵本もどんどん読んでいきたいということで研修もしておりますが、その絵本もなかなか購入できないというのが現状です。

色々なところから、学校単位で「絵本はありますか」と言って借り合ったりするのですが、やはり担任は目の前の子どもたちを見ておりまして、「今、この子どもたちには、こういう絵本を読んでやりたい」、「こんな絵本で、こういう気持ちを育ててやりたい」、「英語に慣れ親しませてやりたい」という気持ちがあるのだけれども、そのものがなかなかない。それを探して何とかしますが、それが毎回できるかというと、「今回はこれでやったから、すぐに準備できないし、しばらく良いかな」というように流れてしまうのかなと思って見ております。

学校でも助け合いながら、あるもので何とかしております。しかし、「より子どもたちの意欲を高める」、「学力の定着につなげる」と申しますと、もう少し充実したといいますか、欲しいときに子どもたちが欲しいものを与えられる環境として、そういった機材の充実だったり、教材の充実だったりということは必要なのかなというように考えております。

あと、少し補足ですけれども、色々な教材を先ほど紹介してもらったものだけに頼っているわけではありません。多分、現場の先生方はそうではないと思います。例えば目の前の子どもたちを見まして、「アルファベットカードを手元に 1 個ずつ欲しいな」と思いました。「それは教材の後ろに付いていませんか」とおっしゃるかもしれません。しかし、あれには線が付いておりません。その文字だけが現れただけのカードですので、今度、読むことから書くことへとなったときには、必ず線の引かれ

たところに文字がある、大文字と小文字の違いはそこであるということを子どもたちに見せてやりたいと思うと、やはり現段階では手作りということになります。

この間、それを教職員で作りましたけれども、時間だったり、細かいことですが、それから紙だったりラミネートだったり、そういったものを捻出するのにもまた時間とお金がかかります。それを学校内で話し合って、「何とかなりませんか」、「子どもにとってこれはとても大事なものなのです」と言って話をして、何とかしております。

そういったところを今日、仲間たちも「ぜひ話すのであれば、そういったことも話してもらえないだろうか」、「みんなやる気はあるのだけれども。」ということで、お伝えをしたいと思ってまいりました。すみません、よろしくお願いいたします。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。それぞれご質問・ご意見あると思いますけれども、4 人のお話を聞いたあとに、改めてみなさんにお伺いしたいと思います。

続きまして、古志原小学校の瀧川教諭、お願いします。

○古志原小学校　瀧川教諭

こんにちは。古志原小学校の瀧川と申します。よろしくお願いします。

学校現場のお話ということで、3 つほどお話をさせていただきたいと思います。1 つ目ですが、やはり何といっても現場の先生方の不安感がとても大きいということが一番ではないかなと思います。

先ほど教材を紹介していただいたのですが、これを見ても、指導のやり方が書いてあっても、「どう使うのだろう」、「実際、どのタイミングで使うのだろう」など、本当に最初から「何をしたら良いのだろう」とか、「私、英語が話せない」という方がとても多くおられます。

現場の先生方は、英語教育のことはずっと前から言われていたことなので、「やらないといけない」とは思っておられるのですが、その不安感がとても多いということが現実としてあります。

この不安感を少しでも取り除くために、職員会議で少しだけ時間をいただいて、「クラスルーム・イングリッシュをみんなで言ってみよう」、「英語のカードゲームを一緒にやってみよう」などのコーナーを設け、少しずつ「こういう感じで良いのか」というような、不安感が少しでもなくなるように、教員で勉強しています。しかし、実際、来年から始まるとなると、「どうしよう」と思っておられる先生はまだまだ多いかなと思います。

2 つ目ですが、先ほど錦織先生もお話されましたが、学習環境の充実というところはとても大きな課題ではないかなと思っております。私の学校は恵まれておりまして、英語ルームという部屋があって、そこにプロジェクターを 1 台置いています。しかし、それを十分に使いこなせているかというと

そうではなくて、例えば、スピーカーを持ってこないと全員に声が届かないですし、そのスピーカーは学校に確実に使えるのが 1 台しかありません。ほかの学年が使っているとそれを使えないので、「みんな耳を澄ませて今日は聞いて」というようにするしかなく、子どもに十分な学習環境をつくってあげられません。そういう学校が多いのではないかなというように思っています。

また、インターネットで英語の歌やちょっとした物語、絵本を読んでくれるようなものがあるのですが、「使いたいな」と思っても、なかなかインターネットに接続できる環境がなく、そこが苦しいなと思います。もちろんつながる教室もあるのですが、そこに行って授業するというのも教室移動というのが大変で、そこが難しいなと思うこともあります。

電子黒板や iPad など、そういうものも「パッと使えたら良いのにな」というように思うこともあります。

また、教材を一から作らないといけないという時間的な困難さもあります。今少しずつカードを作ったりしているのですが、それも 1 人ではできないですし、時間をつくってみんなで作る時間を取ったりするのも大変だなというように思っています。

しかし、錦織先生も言われましたけれども、学校の先生方は「しないといけない」、「がんばろう」という気持ちは強くもっておられるので、少しずつ時間を取ってやっていくようにしています。

3 つ目ですが、私たちの 20 代の年代は、大学のころから「小学校はもう外国語教育が始まるよ」とずっと言われてきておりますので、20 代はみんな「ついに来たか」という気持ちです。やる気をもっておられる先生もとても多いし、外国語に関する研修に出たりしています。「次は僕たち、私たちがやらないといけない」というように思っている先生が多いと思うので、私たち 20 代がまずはがんばって、どんどんチャレンジしていきたいと思っております。

あと、ALT の先生は、生きた英語を教えてくださいます。子どもたちと関わるのがとても好きで、子どもたちは英語を話せないのですが、「〇〇先生」と言って寄って行きます。そういうのを私たち大人は見習わないといけないなというように思います。ALT の先生と身ぶり手ぶりでもコミュニケーションを取り、子どもの教育に生かしていきたいと思います。ALT の先生は必要です。これからも一緒に授業していけたらなというように思っております。

以上です。ありがとうございました。

〇（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

それでは続きまして、玉湯小学校の結田先生お願いします。

〇玉湯小学校　結田教諭

失礼します。玉湯小学校の結田と申します。座って話をさせていただきます。

今、私は小学校3年生を担任しております。やはり3年生も今、年に数回ではあるのですが、指導協力員の方に来ていただいて、一緒に外国語活動に取り組んでおります。小学校3年生なので、自分のことをなかなか英語で表現することは難しいところがあるのですが、それでも本当に楽しんでやっております。

年に数回しかないのですが、「外国語が今日あるんだ」と、すごく楽しみにして学校に来ておりますので、もしも私が来年度持ち上がって 4 年担任になったら、「子どもたちが楽しむから、がんばってやらないといけないな」とか、周りの先生もすごくそういったことは思っておられますが、今まで外国語活動をしていく上で、やはり「ALT の先生方との確認の時間が当日の朝になったりとか、なかなかそういった時間の確保ができなかったりとか、やはり教材の準備、教材研究など、ほかの教科の指導も行わないといけないので、なかなかそこでまた新たに時間を確保するという難しさがある」という話も出ました。

あと、やはり正直、先生方の中でも取組の差があるので、どうしても ALT の先生に任せきりになってしまうとか、なかなかそういったところもあり、これまでに外国語の研修もあるのですが、やはり勉強しようと行かれる先生もおられますし、なかなかそういった機会があっても参加されにくい先生もおられるという現状があります。

そういったときに外国語が始まる。先ほども教材を見せていただいたのですが、やはりあのようなものがあると、初めて外国語活動を指導する教員も「具体的な指導ができそうだ」という見通しは立てられるのですが、今度は授業をしながら学ぶ研修とかあっても、そういった研修の場をたくさん増やしていただけたら良いのかなと。

実際教材に触ってとか、使ったりとか、QR コードなどもあったので、「これはどうやって使うのか」という方もおられるので、教員の中にもそういう実態がありますので、そういった色々な研修の機会を増やしていただけると良いかなと思いますし、先ほども話題になっておりますが、ICT の環境整備もしていただけると、今でもパソコンやプロジェクターは取り合いになっている状況ですので、もう少し整備を整えていただけると、外国語活動だけではなく、色々な教科に使えるのでありがたいなと思います。

あと、やはり ALT もいていただけると良いかなと。子どもたちの前で担任が英語でやり取りする、そういったところも見せながら学習ができると良いなと思っております。以上です。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。それでは、最後に梶田先生お願いします。

○生馬小学校　梶田教諭

失礼します。

私たち学校の教員にはもちろん、外国語活動が英語の教科になるということは、負担感もあり不安感もあります。負担感というのはどういうことかといいますと、例えば「英語科になるので、ふるさと教育をやめて良いよ」というのは学校にはないわけです。「英語科があるから準備が大変でしょう。算数の勉強は適当で良いよ」、そんなことありえないわけです。

限られた時間の中で私たちはやりくりをして、「何とか子どもたちに充実した勉強を」と思うと、「では、何を削るの」と。「○○フライデー」がありますよね。「どこの話」という感じです。そして、「学校に遅くまで残るな」と言われても、でも少しはおやつも食べたいし、世間話をしながら愚痴を聞くというのも必要だと思うと、何を削れば良いのか。それがまずの負担感です。

不安感というのは、やはり英語の免許を持っているわけではないので、「きちんと指導ができるだろうか」、「保護者が見ているぞ」、そういう不安感はあります。

しかし、この歳になった私は、期待感のほうが大きいです。「ようやく来たか」と思っています。ワクワクしています。子どもたちと一緒に、決して得意ではありませんが、「自分の気持ちを外国の人に伝えられる。外国との人とお話ができる。何て素敵なことだろう」。残り少ない教員の時間ですけれども、その時間がついにやって来たというのは、私は期待感というものを持って待っています。

学校の先生方も不安と負担感を先に言われる先生がおられますけれども、「まずやってみようよ」と声掛けをしています。50 代の私は、「それが仕事かな」というように思っているからです。

不安感を減らすには、ALT や協力員さんが是非とも必要です。打ち合わせの時間は本当にありません。「担任 1 人でやれ」と言われたら、私たちは一生懸命やります。しかし、助けてもらえれば心強いこと、鬼に金棒です。ですから、是非とも ALT・協力員さんは確保していただきたいと思います。

生馬小学校に来ていらっしゃる ALT さんは、日本語がほとんどお分かりになりません。「なんて人が来たんだ」という声がほとんどでしたが、一生懸命日本語の勉強をしておられる姿や、子どもたちが身振り手振りで、「これは何て言う」というのを一生懸命会話しようという姿を見ると、「頼もしいな」と思います。

授業中、本当は勝手に授業の順番を変えたらいけないというお約束があるのですけれども、変えてしまうことがあります。そうすると私は 2 つの言葉でがんばります。「I'm sorry」、「I want change」、これで何とか通じて、順番を変えたり、私がハラハラドキドキしながら、ALT の先生とお話しているのを子どもたちが見て、「仕方ないな。うちの担任はあまり話せないからな」と思いながら、それでも許してくれて、自分と同程度の担任の先生の英語でも、「一生懸命聞こうかな」という気持ちで授業に取り組んでいると思います。

こういうのは本当は良くないかもしれませんが、一生懸命さはそれでも伝わるかなというように思

っています。

日本語で、「私は○○です」とか、「今日の天気は○○です」、こういうのは幼稚すぎてバカらしくて、6年生は言うことを嫌がるのだろうと思います。私は6年担任です。しかし英語だと、これが魔法にかかったように声を大きく、表情豊かに言おうとするのです。その意味でも、週2時間の英語科になることは期待感大ありかなと思っています。

重複しますけれども、最後に訴えたいのは、ICTの機器の設置です。生馬小学校には、実物投影機はわずか2台しかありません。教材を変える予算が年16万円ぐらいのところで、10万円の実物投影機を買ってしまうと、ほかにほとんど何も買うことができません。

研修会に行くと、当たり前のように、どのクラスにも大型のディスプレイ、実物投影機、プロジェクターの3点セットが固定してあります。しかし、私どもの学校は、朝、職員室に入って、自分の机の上のパソコンの線を全部外して教室まで持って上がります。そして、ケーブルをつないでようやく見えるようにします。次の時間は、またプロジェクターはほかの先生も言われましたけれども、取り合いになります。実物投影機ももちろんです。取り合いになっているのを「うちはいいよ」、「英語を優先させてね」ということで貸し借りをしています。是非とも買っていただきたいなと思います。

ちなみに、ブラウン管のテレビがまだあります。そのテレビは無用の長物かと思いきや、DVDデッキをつなげてDVDは見ることができます。そのために各学年1台、6台ものブラウン管のテレビがまだありますので、昔の道具を見に来たい方は、うちの学校に来られたら良いかなと思っています。

おまけに、校内の無線LANは途中で切れています。LANが途中まであって、「教頭先生、ここまできていますね」、その次切れてしまっています。限られた条件の下で一生懸命教育活動をやっています。是非ともICTの機器を設置していただいて、私たちの負担感や不安感が期待感やワクワク感、「子どもたちと一緒に」という気持ちに変われるように、そのような援助をしていただければと切に願っています。ありがとうございました。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。

それぞれの年代の4人の先生から今の現場での状況、また、先生方が思っておられることをお話いただきました。ICTを含めた環境整備の充実や、また、ALT・英語協力員の必要性などをお聞かせいただきました。

それでは、引き続きまして質疑応答並びに意見交換のほうに移らせていただきます。先ほど係長のほうからありました資料の説明、また、デジタル教材の実演とがありましたが、併せて今、学校からの報告等を踏まえまして、どなたからでも構いませんので、ご質問・ご意見等ありましたらお願いいたします。

○　松浦市長

先ほど、教材で紙ベースのものもあるとおっしゃっておられましたけれども、紙ベースでも、先ほどのように動画部分は見ることができないわけですか。

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

おっしゃるとおりで紙媒体、同じものが来ますけれども、動画についてはデジタルでなければ見ることができません。

○ 松浦市長

結局、それを見るためにはプロジェクターのようなものがいるということですか。

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

そうです。併せて、プロジェクターだけではなくて、音声を聞く場合にはスピーカーも必要になります。

○　松浦市長

その辺り、文部科学省は何か言っているのですか。

○（事務局）学校教育課　川上指導研修係長

資料の 21 ページを見ていただきますと、文部科学省のほうで「教育の IT 化に向けて環境整備 4 ヵ年」ということで、29 年度まで単年度 1,678 億円、4 年間で 6,712 億円の予算を地方財政措置ということになっておりますが、これが紐付されたものではありませんので、一応国のほうからはこのくらい出しているということになっております。

○ 伊藤 教育委員

確認ですけれども、21 ページにあるのは文部科学省が財務省に要求しているもので、財務省が認めてくれたという額ではないですよね。これから省庁で予算の分捕り合戦をして、認められるのがどれくらいかはまだ未定ですよね。

○ 松浦市長

これは 29 年度までに 4 年間財政措置が講じられたということですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

環境整備 4 ヵ年計画に基づいて、29 年度までのものが載っています。

○ 伊藤教育委員

確定して、もらった額ですか。

○ 松浦市長

教育委員会としては、計画に基づいた予算要求というものをやっておられるのですか。

○（事務局）学校教育課 川上 指導研修係長

松江市のほうでも計画的に ICT、プロジェクター、実物投影機、スクリーンと、3 点セットと呼んでおりますけれども、順次学校のほうに配備できるようにということで計画は入れておりますが、教育委員会としては全クラス配備を一応目標にしております。現在のところ、小学校では 406 学級あります。中学校では 167 学級ありますけれども、小学校に 3 点セットが揃っているのが 186 セット。配備率にしますと、今年度のところで 45.8%、50%にいっておりません。中学校につきましては、先ほど言いました 167 学級中 60 セット。これが 35.9%の設置状態になっております。

○ 松浦市長

この 3 点で、例えば小学校で 46%ぐらいということは、先ほどのみなさん方の話と何となく話が違うような気がするのですけれども。これでいけば、全学級の半分近くに 3 点セットが入っているはずですよね。

○（事務局）学校教育課 川上指導研修係長

学校によって多少数値のほうが違っているところもありますが、中には先を見通して、学校のほうの予算で、市からの予算ではなく、準備をされている学校もあります。そうなってくると、高い配備率をしておられる学校もありますし、市教委からの配備ということで、どうしても数が少なくなっているところもあります。

○ 松浦市長

いや、そうではなくて、今、全学級に対して 45.8%セットされているという話ですよね。ということは、要するに学級の 45%、ですから半分近くは 3 点セットが配布されているはずですよね。

○（事務局）学校教育課 川上 指導研修係長

そうなります。

○ 松浦市長

そうであれば今みたいな話にならないのではないですか。みなさん方の話だと１台しかなくて、それを持って上がったりという話とは少し違うのではないですか。

○ 伊藤教育委員

すみません。今のことに重ねて。学校の格差というか、順番というか、そういうのがあるのかなと思って聞いたのですが。今日お見えになっている先生方の学校は、少し後回しにされているきらいがあるのかどうか。その辺り、市長の質問と関わりもあると思うのですが。

○（事務局）古藤 副教育長

今、ご指摘の件でございますが、例えば生馬小さんは２台とおっしゃいましたけれども、市から現在配備しているのは２台でございます。ただ、八束学園さんについては、確認をさせていただけたらと思っております。地域からの寄贈などで別途に配備されたものもあるというのは今ご説明したのですが、そういったものを除いても、こちらで把握している数はもう少しあるはずだと思っています。

ただ、先ほどのご説明の中に先生方からあったのですけれども、市から入れているのは、いわゆるデジタル黒板のような使い方をする想定で、パソコンとセットにしておりませんので、プロジェクターはあるけれども、それにつなぐパソコンがないとか、そういうのはあるかと思います。先ほどおっしゃったのですけれども、職員室のパソコンを外して持っていかなければいけないというような現状があると思いますので、デジタル教材を活用しようとすると、プロジェクターと実物投影機ではなくて、パソコンとのセットで整備していく必要もあるかと思いますので、そういったところは今後少し検討していかなければいけない要素かと思っております。お答えになるかどうか分かりませんが、今、分かる範囲でございます。

それからすみません、もう一つです。学校によってばらつきがございますので、重なった話になるかもしれませんけれども、一つひとつの学校で見ると、かなり充足率の高い学校もあれば、例えば今の生馬小さんのように、充足率の非常に低い学校もあるという現状はございます。

以上でございます。

○　松浦市長

それはなぜそのような差があるのですか。

○（事務局）古藤 副教育長

こちらで把握した中で一番差がある原因だと思われたのは、先ほどの説明にもありましたように、先を見越して学校の予算で買われた学校、それから、地域からの教育後援会さんなどの寄贈によって、そういうもので買われた学校など、こういったところがあって学校ごとのばらつきが発生したというように捉えております。

○　清水教育長

もう1回確認させてください。この45.8%の充足率ですが、学校規模によっては、本当は何セットが適正かというようなことがあるわけですよね。そういうことも含めて5割弱ですか。最低1セットずつが配られていて、その充足率なのか。しかし、実際は学校規模によっては本当は何セットかもっと必要な場合があります。その辺りを充足率として見るかどうかということはあると思います。

○（事務局）古藤 副教育長

平成26年度、27年度当時、学校教育課で各学校のいわゆる3点セットでない場合もございましたけれども、どれぐらいあるかというのを1回調査したことがございました。おっしゃいましたように、大規模校、小規模校で異なったものも当然ございますが、基本的にそれぞれの学校の割合的には、やはり同じように配備していこうということで、その後の配備計画を立てた経緯がございます。

○　清水教育長

それを見越して大体半分ぐらいはやっているということですよね。

○事務局　古藤副教育長

はい、そのとおりでございます。ただ、どうしても単年度で予算を要求してやっておりますので、当初の配備計画よりも遅れぎみに進んでいることは事実でございます。以上でございます。

○　清水教育長

来年、再来年が先行実施になるわけで、きちんと5・6年は2時間、それから3・4年は1時間となりますので、この使用状況についてはきちんと確認をした上で、不備の点については整備をきちんとするということが必要だろうと思っています。

○ 伊藤 教育委員

今、お答えいただいたように、パソコンが必要だということになれば、3 点セットは当然見直しをして、今のものが使えるように教育委員会としても準備していかないと間に合わなくなりますよね。その辺りは今おっしゃったように見直ししてみてください。

○ 櫻井 教育委員

ハードの問題だと思うのですけれども、これまでは恐らくあまり使われていなかったと思うのです。パソコンなどを整備しても。ところが、国がこのように英語教育の中でそれを必須のような格好で出してきたわけですよね。それがなければ、プロジェクターがなければ、スクリーンがなければ教育ができないと言われる。これはすぐにでも用意すべきことではないかと思います。お金がかかるわけですけれども。

もう一つはやはりソフト面ですよね。先生方のお話を聞いていると、非常に期待と不安とが入り混じったお話をしておられて、やはりその不安の部分のフォローする仕組みですよね。それは当然あると思うのですが、担当の先生方に集まっていただいて、それぞれアイディアを出し合って研究会を立ち上げるとか、そういう先生方の不安を払拭するような対策も非常に大事ではないかと思います。

少しお聞きしたいのですけれども、先ほどのお話の中で、研修があるというお話を聞いたのですけれども、例えば具体的にどういう時間でどういうときに、夏休みを利用されるのか、さらに時間外でオーバーワークになるとか、その辺りはどうなっていますか。

○（事務局）中釜指導主事

先ほどお尋ねのありました研修についてですが、県がするものもございます。それとは別に、市のほうで行っておりますのは、夏休みに 170 名規模ぐらいで、これから進む方向について、すべての学校から来てもらって話をしました。その理論編というのに併せまして、今は先ほども話がありました新教材について、実際の新教材を使って、今のデジタル教材にも触ってもらう、そういった研修を同じ内容で 4 回している最中でございます。

日にちとしましては、冬休み中に 1 回、今度の土曜日に代休が取れる形で 1 回、それからウィークデーの放課後に 2 回。それぞれ先生によって事情がありますので、いずれかの時間には出てもらえるように準備をしてやっております。今日までのところで、70 名程度の先生方が申し込んで研修を受けられる予定になっているところが現状でございます。

以上です。

○　櫻井 教育委員

座学の研修はあるけれども、実際の実習というのはないわけですか。現場に行って、生徒さんとのやり取りを勉強するとか、実際の使い方を勉強する。そういったものはありませんでしたか。

○（事務局）中釜指導主事

新教材につきましては、この 12 月に公表されましたので、その新教材を使ったものが先ほど申し上げました、こちらに来てもらって、座学というか実際に動いての研修です。そして、それとは別に、現在の学習指導要領下での授業については、すべての小学校に 3 種類の研修の中から選んでもらいまして、授業を伴った校内研修をしております。

○　櫻井 教育委員

もう 1 つ質問ですけれども、ALT のほかに協力員という先生方がいらっしゃいますけれども、その先生方は、以前に学校の先生、英語の先生をやっておられたりとか、そういう先生方でしょうか。退職された先生とか。少しお聞きしたいです。

○事務局　中釜指導主事

指導協力員さんにつきましては、1 名ほど幼稚園で英語を教えておられた方がおられますけれども、それ以外の方については、教員を辞められた方等ではなく、英語の堪能な、地域で働いておられたり、お家におられたりする方でございます。

○　櫻井 教育委員

ありがとうございます。

○　清水教育長

梶田先生のほうから「不安感や負担感。でも、それ以上に期待感がある」というお話もありまして、ありがたいなと思います。負担感は何を削れば良いのかというようなこともあるのですけれども、一つはやはり教員の働き方改革、働き方との問題がこれに関わっているのです。

今、英語が入ってくるというのは、先ほども言いましたように、例えば月曜日の 5 時間をもう 1 つ増やして 6 時間にするとか、これはまさしく削るどころの話ではなくて、上乗せをする話なので、なかなか私も良い方策がないのですが、それなら割り切って働き方は働き方改革で、これも改善案を出さなければいけないと思っておりますし、それから、先ほど梶田先生が「期待感が大きい」とおっしゃった、そういう善意にすがってがんばっていただく。そのためには、先ほど言った機材なども、で

きる限り教育委員会としては、ちょうど今日、市長もおられますのでお願いをしながら、その辺りは充実をしていく必要があるのだろうなとは思います。なるべく英語をしやすい環境を整えていくということが大切なのだろうなと、みなさん方のお話を聞いていて。

もう 1 つ、ALT のこともそうですよね。時間数も増えてきますので、今、16 名でやっているのですが、今度はなかなか ALT が回ってくることがやはり少なくなるのかなというように思っておりますので、その辺りも実は課題なのかなと思っております。

やはりみなさん方としては大分心強いですかね、ALT さんがおられるというのは。そうだろうと思います。特にご年配の先生方は、ALT さんがいらっしゃれば多分心強いだろうなと思います。何とか本当はその辺りで良い方法があるのかと。

あとは協力員さんですね。協力員さんはベテランの方なので上手に話される、英語の熟達した人なので、その辺りも色々回ってもらう方法があるのか、色々研究することが多いなと思っておりますので、教育委員会としてもこれから色々な面で検討し、実際来年からの先行実施、新たに色々な問題がこれ以外に出てくるだろうなと思っておりますので、じっくり検討していければなというように思っております。よろしくお願いしたいと思います。

○ 伊藤 教育委員

非常に心苦しいのは、この前の第 1 回の会議で多忙感について伺ったんですね。学校の先生方は大変多忙な中で良く努力してくださっている。その上にこれからのということで。ただ、ALT や指導協力員、人を確保するのは市教委の責任でやらなければいけないと思うのです。人員も精一杯確保して、さらに上乗せできないか。

○ 松浦市長

資料 6 の一番上の表、ALT のその他の一番下のところですけれども、「JET-ALT 以外の民間業者活用についても」というのは、これはどういうことですかね。うちの場合は民間の業者に委託をして、あれを送ってもらっていますよね。うちの場合はこれに該当するわけですか。

○ 清水教育長

該当しません。JET だけしか国の補助対象にならないのです。うちの場合は民間を活用していますけれども、うちは対象にならないのです。ですから、なるように今、国へ。そういう意味なのです。

○ 松浦市長

今、どのくらい。

○ 清水教育長

今、16 人で 6,800 万円くらい人件費として使っているのです。そして、協力員と合わせると 7,000 万円を少し超えるくらいの予算額でやっておりますので、これがやってくれれば、うちとしてはもう少し人数を増やしたりということができるのですが。

○ 松浦市長

JET を使えば良いのではないですか。

○ 清水教育長

JET はやり方が違って、家を探したり、細々としたことをやらなければいけないのです。うちは一時期 JET を使っていたことがあるのですけれども、それが今の ALT のやり方、民間を使ったほうが多少、行政としてはかなり手間が少なくなっているということで、今、切り替えているのですが、本当はこれが補助対象になってお金をもらえれば一番。これを強く国に言っていくということを今やっております。市長会からも出してもらっていましたか。

○ （事務局）政策部 井田部長

出しています。

○ 清水教育長

これは大きいものですから。

○ 松浦市長

それから、民間の業者に頼むと、先ほどもみなさん方から意見が出ておりましたけれども、先生方と ALT との打ち合わせという話があるのですけれども、勝手に ALT というか、それを使うということができないという話を聞きましたけれども、つまり契約か何かできちんと謳っていないとだめだというような話を聞いたのですが、それはどうなのですか。

○ （事務局）三賀森 学校教育課長

今、専門業者と契約しているのですけれども、契約の種類がありまして、今の契約の場合には、事前に連絡を取って、「こういう流れで授業をお願いします」というように、事前に約束するわけなのです。そうすると、授業のときに急遽「ここでこうして」ということができないという決まりになって

おりまして、もし変更するのであれば、事前に連絡をして、そこでやるという面倒臭いことになるのです。

裏を返すと、先にお願いしておくと、授業の中でも ALT が全部してくれるという良さもあったのかもしれませんが、今まではすべての授業に ALT 又は英語協力員がいらっしゃったので、担任も特に英語教育に不安がある方は、「お任せ」ということは本当は良くないのですが、できたのです。

ところが、3 倍の授業になるということは、今後単純に考えても、3 回のうち 2 回は自分がしなければいけないとなると、今の契約内容を変えて、その場でも何か言ったらすぐに変更してもらうような契約内容に変えると対応できるだろうということで、今、委託業者ともその打ち合わせをしているところです。

以前、先ほど教育長もおっしゃいましたけれども、JET のほうを使っていたという記録がありまして、そのときに学校教育課のほうで担当していた者が残っておりまして、様子を聞きますと、「JET が来たら、その人を 24 時間おもりしなければならない」と。そうすると、夜中の何時ごろでも突然電話がかかってきたりとか、ゴミの始末が悪くて、全部こちらの責任になったりとか、夜中に大騒ぎしてもこちらの責任になったりとか、あとは交通事故や車の手配とか、結局、英語業務以外のことでの労力がすごく大変になってくるということで、徐々に委託業者の方に変えて、先生たちがそこに集中してもらえるような状況をつくり、事務局のほうもそこに集中できるような感じになったということを聞いております。

○ 松浦市長

そのときに、みなさん方の意見の中で、ALT をどのように使うかというのは多分非常に悩まれているのではないかという感じがしたのです。ですからまず、市の教育委員会のほうでパターン化するというのはおかしいのだけれども、ある程度このように ALT を使うとか、そういうようなものをあらかじめ決めるというか、それはもちろん先生方の意見も聞きながらということですけれども、何かそういう工夫はできないものなのですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

基本、ALT は Assistant Language Teacher なので、T1 は担任がして、その途中途中に英語の発音や会話をするときに ALT に入ってもらうということが本来だと思いますが、今申しましたように、色々な教材準備やほかの教科に追われて、「お任せする」ということになっているところもあるかもしれません。

今、4 名の方に来てもらっていますので、簡単で良いですので、それぞれの学校で、ALT の先生との授業の組み方というのがどのような状態か、瀧川先生、結田先生、錦織先生、梶田先生の順番で教

えていただけますか。

○　古志原小学校　瀧川教諭

ALT の先生との確認は、1 週間に 1 回しか来られませんが、その日の朝の 10 分ほどでしています。一応事前の指導案みたいなものは FAX で送るのですが、その朝の 10 分間で詳しく、「このようにして、頼んでいたゲームはここでお願いしています。大丈夫ですよね？」や、「そのあとは私たちと一緒にデモンストレーションをして、このようにしますよね。」というような確認をしています。

日本語があまりお話できない方なので、コミュニケーションをとるのが少し大変です。でも、私は英語でコミュニケーションをとることを楽しんでやっています。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

授業は担任の先生が主で。

○古志原小学校　瀧川教諭

基本は主でやっています。

○　松浦市長

どういう使い方をしているのですか。

○　古志原小学校　瀧川教諭

単語やキーワードの練習をするときなど発音してもらっています。あと、向こうの文化を紹介してもらったりしています。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

結田先生。今、3 年生なのでなかなか会話はないかもしれませんが、以前のイメージでお願いします。

○　玉湯小学校　結田教諭

先ほど瀧川先生も言われたのですが、同じような形でやっておりますし、言いにくいのですが、本当にお任せ状態で、あとは日本語で少し担任が補足説明をするというように使っています。

○　松浦市長

45 分の授業の大半は ALT がやるという感じになっておられるのですか。

○　玉湯小学校　結田教諭

そうですね。そういったクラスも正直あります。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

今は、ALT がどちらかというと T1 をやって、担任が日本語で子どもたちに説明するというようなイメージですか。

○　玉湯小学校　結田教諭

そうです。

○　松浦市長

少し古志原とは違うということですか。

○　玉湯小学校　結田教諭

先生によって。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

クラス担任によって違うということですか。

○　玉湯小学校　結田教諭

はい。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

担任によっては自分が主としてやる場合もあれば、担任によっては同じ学年でもお任せという人もおられるというように聞いております。

○　松浦市長

そうですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

錦織先生、どうですか。

○　八束学園　錦織教諭

本校は5・6年生のほうに、今年度は5年2クラスと6年1クラスに3コマ入っていただいたのですけれども、担任が最初のところで「どうしたいか」ということを話し合って、もちろんT1でやるのですが、その中に初めて英語をする先生が1人混じっていまして、授業もほとんど見たことがない。要するに結論から言いますと、この3人がそれぞれ違う形態でALTと一緒にしています。

私はほぼ私がT1で、デモンストレーションであるとか、普通の会話、わざと英語で話しかけて返してもらう。それが授業の中で何度かありまして、「どうも先生は何かについて話しているらしい」という二重的な会話も子どもたちに聞かせ、必要な、例えば聞く、大事なセンテンスなんかもALTさんに言ってもらうと。

ですから、ざっくばらんの中で強弱をつけて、「こちらが主だけど出てくるのは」というようなのを少し確認したりとか、きちんと指導案がありますので、それを見てやっていると。

そうではない担任は「全部お任せ」、「半分お任せ」と、選ぶことができますので、委託業者ほうから「どうしますか」というのが来ていまして、委託業者から指導案はもう来ていますので、「ここをお願いしたい」。でも、違うところは、必ずそれは入れてもらうようにお願いしてあるので、担任がします。担任はするけれども、「流れは理解しておいてください」、「ここはそちらが主導でやってください」。それが最初の段階ではとても長いのだけれども、3学期にはそれが逆転するようにお願いしています。担任が慣れてきたら担任が多くなって、「その補助をするようにしてください」というようにして、1年単位でその使い方を変えていくようにということで、それが書けるようなところがあるので、それでお願いしてあります。

○　松浦市長

それは各担任が決めるわけですか。

○　八束学園　錦織教諭

はい、そうです。担任が決めます。

○　松浦市長

校長先生とかは全然関わっていないのですか。

○　八束学園　錦織教諭

「このようにしています」ということはお話しますけれども、担任が一番やりやすく、少しずつスキルアップしていけるように。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

梶田先生、お願いします。

○ 生馬小学校　梶田教諭

今、外国語活動では「Hi,friends」という教科書というか、それを使っていますので、それの指導案というか、こういう内容で授業を進めましょうというものがあります。

加えて、ALT さんと実際はお話して決めれば良いのですけれども、うちの場合は話をする時間が正直ありません。単学級 6 学年が 1 クラスと 5 学年 1 クラス、その確認をするのは教務主任です。英語担当という名前がついていて、1 コマ空き時間があるので、その時間に ALT と確認をします。その「Hi,friends」を見て、「こういう流れでやれるよね」と言いながら確認をしてもらっています。

その書いたものを、「梶田先生、次の授業はこのようにやったら良いのではないかなと思うので、僕と ALT の先生で確認したよ」と言われたそのプリントを見て、大体 「Hi,friends」 と内容は同じかなということで進めています。

授業の中では、最初に「Good morning」とか、「Hello」とか言って入ってこられて、心ほぐしというか、気持ちほぐしの時間。それは私と ALT の先生と 2 人でやります。授業が始まって、大事なセンテンスとかキーワードをリピートして練習するのは ALT の先生にお任せ。「in English?」と言ってお願いしています。

それから、今、6 年生では桃太郎の劇を英語でやってみようという、そういう活動をしていますが、3 つに分かれて練習をしているときに、順繰りにその会場を ALT の先生に回っていただいて、アドバイスをしていただきます。そうすると、子どもたちは、「アドバイスをして」、「Please advice」と言って、「Big Voice」とか、子どもにも分かるような、3 センテンスぐらいの英語で指導をしてもらっています。

読み語りをしてくださるときもあって、「自分がお母さんから読んでもらった本だよ」と。イギリスの方なのですけれども、イギリスから持ってきた大事な本だというのを読んで聞かせてくださることもあります。6 年生は私が T1 でやります。5 年生でも、ほとんど今は T1 でやっております。

○ 伊藤 教育委員

今、実態で、詳しく分かりやすくするご説明を聞いたけれども、5・6 年生では外国語科の教科になるといったときの目標がありますよね。そうすると、今までの外国語活動と少し違ってこなければい

けないし、目標が示されるわけで、その辺りでこれから今のALTとのあり方とか、これから少しがんばらないといけないなというような状況があれば、お聞かせ願いたい。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

それについてはどうでしょうか。順番にでも良いですし、どなたからでも良いですけれども。

教科になるということは、来年、再来年は先行実施で行うわけですけれども、外国語活動という形ですので活動の延長なのですが、教科になるということは、今度は評価をしなくてはいけなくなってきますので、それについてまた一緒になって検討していきたいと思っておりまして、今、それに向けて各学校のほうで、「具体的にどのような形でしようか」というところまでは決まっていないのではないかと思います。

○ 伊藤 教育委員

移行措置期間に準備してやっていかなければいけないし、課題があったり、今度は32年度からの教科の目標に向かって打ち合わせて充実していかないといけない。この2年間で、各学校で一つまた洗い出ししていただけたらなと思います。

○ 松浦市長

そういう場合、学校任せになっているのですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

基本、教育委員会の外国語担当の者が中心になって、今回もこのメンバーの方々の大半の方は、来年度からの先行実施に向けてどうしようかという検討委員会のメンバーですので、そこに校長代表、教頭代表もいらっしゃって、そこで話し合ったことを、今度、校長会等を通じて各学校に下ろしていますので、32年度以降に向けてもそのような形で全体として下ろしていきます。

○（事務局）政策部 須山次長

すみません、先ほどのALTのお話です。JETから民間に変えた張本人が私なのですけれども、そのときの状況のお話があったのですが、もう一つ。

質ということで、JETで来た場合は、向こうから学生などが、何も日本のことを知らずに遊び半分といった感じで来ていて、教えることとか、そういうことにはあまり興味がなかったようです。

そのようなことがあって、今の生活のこともだったのですけれども、実際の学校での質のこともあって、全国でだんだん採用も多くなって、それで質がどんどん落ちてきたということがあって、そう

すると、民間でJETで働いたあと、3年間とか5年間で切れますので、それでもまだ意欲ある人間が、そういう民間のALT会社などに就職することが多くて、全体的の素質は民間のほうが良いということが大きな理由でした。

今、先生からの指示命令系統が、委託をかけた場合に、あのころ労働局が非常に厳しく言っておりまして、指示命令系統が会社から下りていかなくてはいけない形なのに、それを学校で指示命令をしていたということで、契約がおかしいということが全国的に厳しくなりまして、それで必ずALTさんには必ず会社を経由していかなくてはいけない。これは非常に面倒なことだなというところで、どちらにしようか迷ったところが、その学校ではやはり先生とすぐにそこにいて、話をして、その場で臨機応変ということが 一番なのだなと言いながらも、質の問題があったり、あとはそういうのもきめ細かな契約のところで何とかやっていけるのではないかというようなことから変えてみたのですけれども、こうやって色々やってみたら、契約上のことも出てくるのではないのかと思います。

もう一つ、日本語ができないALTさんというのも、私が変えた当時は、その一つの大きな理由に、全くできない人が来ていたので、そのALT会社のALTは、少なくとも日常会話、そういうことができて、先生とのコミュニケーションが英語でなくて日本語でできるような人が来るのだということが条件にありましたもので、そういうことをやったのですけれども、今、お話を聞くと、そうではない人が来ているというのが、少し条項が変わったのかなと逆に思うぐらい、それは変だなというように聞いていたところです。

○ 松浦市長

それは契約条項に入っていたのですか。

○（事務局）政策部 須山次長

私がいたときには契約条項にあったような気がするのですけれども、ただ、途中でALTが変わったりしたときには、なかなかそのあとに入ってくるのは、そういう条件に当てはまらない者も来るかもしれないというようなことはあったのですけれども、基本的には、そういう条項があったのではないかと思うのですけれども、もしそうであればきちんと言わなければいけないだろうと思います。

○ 八束学園　錦織教諭

９月からお代わりになっていて。

○（事務局）不明

なるほど。それならそういうことはあるかもしれない。

○　松浦市長

ほかのところは大体日本語ができるのですか。先ほどの瀧川さんは「あまりできない」と言っていたのですが。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

契約について少し補足します。

○（事務局）学校教育課 中釜 指導主事

先ほどありました契約条項の中に、日本語の初級レベルというのは今でも実はございますが、その初級レベルを、どのレベルから初級レベルと判断するかというところからだんだん曖昧になってきている部分があるのではないかと思います。

１つの原因として、今、全国的に非常にニーズが高まっていまして、人材不足がどこでもあるのですけれども、同じことで、「このレベルでも初級レベルとみよう」ということが起こっているのかもしれません。これは確認しておりませんので、確かなことではございません。

○　松浦市長

もう一つ、日本人の協力員、どちらが良いと思っているのですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

それぞれの学校にはALTと協力員のどちらも来ておられるのですが、それは先生によっての捉え方もあるかもしれませんが、先生方からするとどちらが良いというのがありますか。

○　複数の教諭

ALTが良いです。

○　松浦市長

どうしてですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

それぞれ理由を簡単に。

○　八束学園　錦織教諭

子どもたちは、言語だけを学んでいるわけではないので、その人をとおして世界の国を見たりするというのは、やはり ALT さんでないと、本とかそうではなくて、その人の持っているものというか、それは授業だけにとどまらないので、ALT さんについてのアンケートを子どもたちに採ったときに、「子どもたちは､英語が話せてどのようにコミュニケーションをとっているのかな｣と思ったときに、子どもはもっとグローバルというか､「自分たちを理解しようとしてくれている」とか､「違う国のことを教えてくれながらも、自分たちの文化を受け入れようとしてくれている」とか、とても私たちでは教えられないものを、授業もそうだし、それ以外でも学んでいるので、ALT さんが私は良いと思います。

○　生馬小学校　梶田教諭

ALT さんには授業が上手下手というのは望んでおりません。そうではなくて、彼の誠実さとか、子どもたちの言葉に耳を傾けてくれているとか、そういう態度を大きく期待しています。

子どもたちは、通じるとすごく喜ぶのです。「自分の英語が通じた」。単語ではなくて、文法は間違っているのだけれども、習った英語を使って「その人に何か話したい」とか「伝えたい」とか一生懸命する。そういう意味でも ALT を希望します。

また、日本語は本当にたどたどしいのですけれども、一生懸命片仮名・平仮名、今は漢字も練習してくださって、そういう様子を子どもたちが見て、1 人ぼっちで、縁もゆかりもない日本にやってきて、一生懸命日本のことを理解しようとしてくれている彼そのものをすごく好きでいてくれます。協力員さんがだめということではないのですけれども、協力員さんは日本語で話せば分かってくださるので、そうではない世界を子どもたちは楽しんでいると思います。

○　玉湯小学校　結田教諭

私も ALT 希望です。やはり異文化交流という面もありますし、指導協力員の方が良くないということではなくて、子どもたちの様子を見てみると、やはり日本人の方なので、どこか安心感があって話しているので、外国の方と緊張感を持って話すとか、自分の思いが伝わったときは本当に喜ぶので、そういう姿を見ていても、やはり ALT のほうが良いのかなと思います。

○　古志原小学校　瀧川教諭

私はどちらが良いというのは言えないなと思っています。ALT の方はもちろん、先生方が話されたように、一生懸命こちらが言う言葉を理解してくれるし、子どもが言うこともお話を聞いてくださるので、そういう部分でとても良いなと思います。

協力員の方はとても英語が堪能であり、もちろん日本語も話せます。英語だけで話すと引いてしまう子もいるので、子どものことを理解しながら、協力員さんの安心感のある英語の授業も大事ではないかなと思っています。

○　松浦市長

子どもによって違うということですか。

○　古志原小学校　瀧川教諭

それもあります。

○　藤原 教育委員

ALT の先生には、授業を部分的にやっていただく場合もあるし、授業全体がお任せの形になることもあるというお話がありましたけれども、協力員さんも同じような形で関わられるのでしょうか。

○（事務局）学校教育課 中釜指導主事

ALT さんについても指導協力員さんについても、授業中の関わりについては大体同じであるというようにお考えいただいて良いと思います。

補足で、指導協力員については、13 名お願いしているうち、4 名が外国出身の方で、日本にお住まいの方です。そして、実際の活用の仕方としては、多くの学校が 5・6 年生に ALT を活用して、そして教育課程外で国際理解であったりとか、そういうところの 1 年生から 4 年生の授業で指導協力員さんを活用した授業をしている学校が多いです。ただ、学校の規模によっては、6 年生を ALT で、5 年生を指導協力員というように使い分けている学校もあります。

なぜ、このような使い分けをするかというと、下の学年の子どもであればあるほど、先ほど話があったように、日本語も分かる人がいたほうが子どもも安心するし、担任も安心される場合が多いという理由から、比較的下学年で指導協力員さんを活用する場合が多いように思っております。

以上です。

○　松浦市長

時間もあれですが、負担感の問題というのは、あまり今まで話が出ていないのですけれども、いずれにしても年間 70 時間だとか、そういうものがオンされていくということですので、今言われているような教員の負担感というものがさらに大きくなるのではないかというように思うのですが、その辺りはどのように考えておられますか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

先生の中にやる気は誰も持っておられますけれども、負担感を持っておられると思います。特にその中でALTのことに関していいますと、今まで外国語活動の時間には必ずALTか英語指導協力員がいたのに、今度からいなくなる授業のほうが多くなると、単純に3回に1回しか来なくなる。そうなると余計に、どの先生方もおっしゃっておられましたけれども、ICT機器の活用。そのデジタル教材を使って、そこでネイティブの声が聞こえてくるとか、そのとおりに進めることによって、英語の外国語活動ができるという安心感はあると思います。

そのプロジェクターの数字として、小学校で45.8と出ておりますから、私も10年ぶりに松江に帰ってきたので今現在のことは分からないのですけれども、今、ある数とすれば何台かあっても、昔のものはすごく大きくて、スイッチを入れてもなかなか温まらなくてつかない。それまでカウントされているかもしれませんが、5分・10分の間に持って行って、すぐにセットして使えるとなると、学校の中でも活用できる機材というのは案外限られてくるのではないかなというように思っておりますので、先ほどもありました使用状況のことを確認した上で、本当に効率的に活用できるものを揃えていきたいなと思っています。

そして、負担について、まずはそういう機材をきちんと整理して、先生方が安心してもらうことが負担感が解消されていくのではないかなと考えております。

○ 松浦市長

それで良いのですか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

それで良いかどうかというと、実際にはあとは経験になるのではないかと思うのですけれども、小学校の先生方というのは、松江の先生方はもちろんですけれども、大変真面目なのです。中学校は真面目ではないというわけではないですよ。特に小さい子どもたちから、勉強だけではなくて、色々な生活習慣から色々なルール、社会性も全部教えていこうという思いがあるので、すごくたくさん引き出しを持っておられます。それを今度英語となると、そういう経験がない中で教えなくてはいけないという不安や負担がきっとあるのだろうと思います。

そのためには教材的なところ、教具をそろえるのと併せてALTの配置もできるだけ活用できるような方向を支援していただきたいなというようには思っておりますが、あとは定期的に色々研修を行ったりしながら、先生方が本当に自信を持って授業に臨めるような体制づくりなども考えていきたいというように思っています。

○　松浦市長

あとは、誰も出なかったですけれども、教員の数を増やすとか、そういう問題というのは当然ありますよね。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

英語に限らず、今、小学校の現場で一番何をしてほしいかというと、先生の数を増やしてほしい。「1 日 1 時間でも良いから、教材づくりや教材研究をする、そういう空いた時間がほしい」というのは、どこの学校の先生方も思っておられると思います。

松江市においては、学力向上支援員として今年 6 名の方を市費として雇用しているのですが、来年に向けて、その学力向上支援員の先生方が T2 ではなくて、T1 で授業をしてもらえるような制度づくりを今やっておりまして、先日の校長会のほうでも校長先生方にそのことをお伝えしました。

そういう制度が本当に子どもたちにとっての学力向上の支援になるとか、先生方の負担が減るということであれば、今後も予算措置をお願いしながら、学力向上支援員というものを市費としてお願いしていくと、少しなりとも先生の数が増えて、先生方の負担が減るのではないかなと考えております。

○　伊藤 教育委員

今の不安とか負担感ということが当然あるというご意見ですよね。

「不安とか負担は十分承知していますので、市はこのようにやります」とか、「先生方の不安感がなくなるように、一緒に私たちはこういうことでやりますから」とお伝えをする場を設けたい。

中核市になって、この 4 月から研修も松江市教委がやらなければいけなくなりました。ですから、そういうところも具体的に早く動きながら受け止めていますという動きをしてみて、考えてみてもらえませんか。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

了解しました。ありがとうございます。

先ほども少し、中釜から話しましたが、来年度の新教材に向けての研修会、具体的な指導をする研修会を 4 回計画しております。先生方の捉え、みなさん不安だけれども頑張ろうという気持ちがあるのですが、どこかに「まだ先」、4 月からなのだけれども、「実際に始まっていないからまだ先」と思っておられるところもあるのではないかと思うのです。

というのが、その研修会に参加される学校によって、参加比率がまちまちなのです。多いところは 8 人、9 人その研修会に出られる方もある学校もあるし、0 の学校もあります。特にその 0 の学校の中

には、これまでも研修を一生懸命されている形跡があまりないところも、それでも0なのです。

先日の校長会のときにも、そのことをもう1回宣伝したのです。「今回、同じような研修を4回する」と。「市教委が同じような研修を4回別日にするということの意味がお分かりですか。ですから、ぜひもう1回学校に帰って、先生方にそのことをお伝えください」と言って、数名出てきたのですが、本当に出てほしいなと思うような学校はなかなか出てこなかったりするのですけれども、今、伊藤委員さんからおっしゃっていただきましたように、来年度になって具体的に始まったときに、それでも市教委として応援できるように研修を計画したり、また、必要によっては学校などにお邪魔して説明したりするような機会をつくっていきたいと思います。

○　伊藤 教育委員

一言。こういう大改革のときに、研修を命ずるのは校長さんですから。「2年後の自分の学校をどうするか、みなさん研修して来なさい」という姿勢でないと、管理職の責任は果たせないと思います。一つ、よろしくお願いします。あまり校長さんに「お願いします」と言わなくても、行くという立場でやらないとできないと思います。

○　清水教育長

最後に1点だけ。指導体制の中で、これは文部科学省も挙げているのですけれども、中学校の英語の先生との連携については文科も強く言っているわけです。それで、各学園で今、こうやって進めておられるのですが、中学校の英語の先生は当然専科の先生がいるわけで、その辺の協力体制というのですか、連携というのはどうなっているのか。一言だけ、簡単に答えていただきたい。もしそういうことがやっていなければ、教育委員会のほうからお願いをしておく必要が多少あると思っています。

○　古志原小学校　瀧川教諭

中学校との連携は、部会があって、英語科のほうでは、中学校の先生に来ていただいて、アルファベットの練習をするというのを毎年していただいています。

小学校の外国語活動も見に来ていただいて、意見交換するという時間も、年に1回はとっています。

○　玉湯小学校　結田教諭

自分が把握していないのかやっていないのか、すみませんが分かりません。

○　清水教育長

そういう機会があったことは分からないわけですか。

○　玉湯小学校　結田教諭

そうです。申し訳ないですけれども。

○　八束学園　錦織教諭

失礼します。本校は小中一貫校ですので、中学校の教員が、6 年生においてのみ入っています。私、昨年度から来ましたので、それ以降のことは分かりかねますが、毎週来てもらっています。

この間も話したところですが、これからその単元をお互いに擦り合わせて、どこでどのように効果的に、そして担任も持っておりますし、すべてのコマ数の英語、中学校のほうに入っていますので、その中でいかにどのような連携が取れるかというようなこと、それから具体的な内容というようなことを、これからまだきちんと出てきていませんから、はっきり決まったら、やらなければいけないというような話はしております。

○　生馬小学校　梶田教諭

生馬小学校は千鳥の杜学園です。その学園の中の部会の交流はあります。それから、夏休みに中学校へ 1 日入学というのをしますが、その折に国語の授業で参加したいとか、外国語・英語の活動で参加したいとか、そういうのを子どもたちが希望を出して、そのとおりになって、中学校の先生から英語の授業を受けた子どももいます。

ただ、単独で一中の先生が我が校にやってきて授業をしてくださるとか、それから、我が校が今年は外国語活動の研究授業をいたしませんでしたので、公開の授業をして見に来ていただくとか、そういうことは今年度はございませんでした。

○　清水教育長

全体に中学校の先生方の温度が低いということを少し聞いたものですから、各学園でどうしたら良いのかなということを少しお聞きしました。もしそうであれば、また中学校にも少し言っておく必要がある。

○（事務局）三賀森 学校教育課長

ありがとうございました。市教研のほうで中学校は英語部会があるのですが、小学校には外国語部会というのがなかったのですけれども、来年度から市教研で外国語部会というものを新たにつくられるということを聞いております。

そうなると、中学校の英語部会と小学校の外国語の先生方が、共通して縦のつながりが一層つくれ

るのではないかなというのは期待しているところです。

もっと現場の声をお聞きして、色々なことを一緒に考えたいと思うのですけれども、時間になってしまいました。今日は松浦市長はじめ、教育委員の皆様方に来ていただきました。そして、現場の先生方を代表して4名の先生方に来ていただきました。不安感、負担感は持っているけれども、それでもがんばるという気持ちをお聞きしました。

そのためにICT機器の整備、それからALT、英語協力員の人数の確保という、お金がかかることというのは、どうしてもそれは予算的なものがあるので難しいということはもちろん分かっているのですけれども、今、どんどん時代が変わっていって、外国語教育というものに力を入れていく。10年後の日本の子どもたちを目指して、今回、新しい新学習指導要領ができています。それには外国語の力がどれだけ大切かということがそれに示されていることですので、何とか来年度以降も必要だと思うものをぜひ応援していただきたいと思います。

あと、ソフト面に関しては、我々学校教育課を中心として、学校の現場の先生方を少しでも精神的な負担を減らしていけるように協力して取り組んでいきたいと思っています。みなさん、今日は長時間、ありがとうございました。

これをもちまして、第2回の松江市総合教育会議を終了したいと思います。今日はお疲れさまでした。ありがとうございました。